

LICENSED PRODUCT  
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

妙々奇談

一

三  
三  
堂  
院

遠 13  
1866

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21

妙

奇

萬

八遠18  
1866  
15

序

劉貞父滑稽善諷。

酷甚<sup>九</sup>牙<sup>下</sup>又<sup>三</sup>而<sup>三</sup>晚<sup>三</sup>得<sup>三</sup>惡

疾。王景亮結社<sup>三</sup>相<sup>三</sup>。



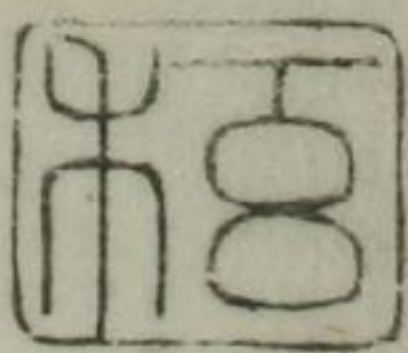
弭猪嘴。闕而舉。小社  
糞粉。黃魚直好。豔語。  
詩詞盛傳。而秀。公以  
為。高受泥。初牛業報。

然則妄言綺語愉快。  
一時而人非鬼責。固  
莫逃幽明之罰矣。此  
編之作。考能解。此理。

否乎。

太平萬年。冬至之日。

水鏡山人撰



妙奇談序

詩を作らざる。田をばらばらとて。家業草創の老翁。金言道風の花の字も。香がまひら。蚯蚓はくく。錢釘を曲く。殘念をこころあくる。樸仁人の名。ちりり。太平の海代の商人百姓の。那。獨味。曾。う。米。蒂。其。昌。が。當。生。帳。を。記。唐宋の詩を。二上り。諷。耕。牧。業。を。捨。く。天下國家を治る。義。段。を。辱。む。計。を。か。る。時。を。得。く。賢。と。都。會。小。

種は廊を開き、詩を高く、画を賣り、令儲をもとむ  
と互賣多を引れ、とて、燼本、火の付、唐紙、水の色  
み、如、農商の、ま、の、え、門、は、入、式、ハ、身、を、し、り、ち、ち、式  
ハ、家、と、込、ま、め、幾、ま、く、我、周、滑、平、先、生、是、を、歎、き、今、所  
の、ま、く、世、の、業、一、つ、ま、画、の、先、生、遠、の、隱、微、を、技、一、小、冊、子  
を、著、々、の、を、諧、諷、ち、の、と、く、た、その、論、ハ、奇、と、妙、と、漢、人  
其、微、を、を、味、く、知、く、く、或、云、先、生、ハ、何、人、ぞ、答、曰、人、多、  
三、教、の、本、旨、と、知、身、以、保、ち、家、と、の、一、場、ト、の、小、技

狂哥誹諧。二天作。二進。二十。春耕。秋ハ收。その外  
何みくも、中、ま、き、知、ら、事、ハ、實、又、其、能、宗、持、の、奇  
人、と、い、つ、を、ぞ、一、あ、ま、を、序、と、し、ん、

泰平萬年 正月元旦

受業 富基 紀杉 撰

妙々奇談卷上 附評

目錄

- 第一回 良雄說寶齋
- 第二回 釋尊詰志佛
- 第三回 米芾詈山文
- 第四回 栗三壓五三

妙々奇談上



周滑しゅうくわ先生著

以人

五覽ごらん通と墨無鏡

編集

第一回

良雄說寶齋

寶齋ほうさい老人らうじん或曰あるひ是こゝ起宿醉おきしゆくさい既いま醒さめ下くだ却酒獨酌かへしゅどくしやくを伴とも

えんとせーおがら表おもての方かたは音信おんしんと者ものらうらう何方いづれよりと尋たずねばば芝しば辺へのとのやや暫しばらく閑いさまと清きよひひ淡たん一いつ交まじり

て。年上波り。若くかゞ。死通ると。静く。と。若て。  
老人その寛急何人か。い。と。を。二。の。後。  
も。麻上下を著し。威りて。猛か。心。つ。や。み。終。  
し。出。會。本。一。序。方。も。光。入。度。心。性。名。り。同。一。批。者。  
義。ハ。序。存。る。心。元。派。年。中。お。果。し。負。石。良。雄。と。  
て。此。度。も。度。心。配。禪。岳。寺。石。碑。の。文。白。心。法。が。友。  
事。有。て。然。り。年。上。い。り。た。と。老人曰。其。許。換。忠。誠。ハ。  
天。地。を。貫。ふ。日。月。と。同。輝。く。事。朝。夕。感。ず。と。傳。り。

有。聊。不。文。を。以。石。に。鐫。り。後。を。傳。人。と。存。と。一。も。不。肖。  
が。微。意。う。り。謙。退。し。て。換。換。し。と。良。雄。曰。彼。舉。  
お。る。は。し。る。名。の。常。の。事。と。い。ふ。た。と。家。を。平。一。  
向。ひ。下。武。急。心。より。目。を。刺。て。死。し。と。事。思。  
り。我。ホ。豈。後。世。の。名。以。會。ふ。ん。と。し。う。ち。む。止。  
べ。い。ざ。る。臣。子。の。誠。よ。り。か。の。如。き。も。あ。や。終。る。に。ま。時。  
の。位。持。廣。太。の。丹。慍。遺。首。を。泉。樂。寺。に。引。と。  
葬。玉。つ。り。四。十。余。人。一。同。靈。魂。め。る。不。を。得。た。と。





の碑文、刺之不克の四字、不稽あり。刺、撃との字、  
義、いくま、ちと、ま、鬼羅氏、根あり、よつて、王君  
その怒、忍び、を、一撃の間、遅せんと、玉ひ  
。鬼羅氏、元來、武辺、不案内の、人、あき、一丈、も、近  
。之、射、う。沈勇、自反の、君、多、傍近、を、と、  
刺、少、程、ま、本、中、も、あ、ま、ま、あ、ま、ま、  
如、く、一、刀、を、付、て、鬼羅氏、周章、大、方、を、次、その、内  
果、寄、集、て、之、を、抱、め、て、九、克、一、匹、敵

相手の謂り、て、孔夫子、筆法、志、う。今、鬼羅氏、臆、  
て、お、敵、射、し、ま、う、ハ、つ、ぞ、を、刺、之、不、克、と、脩、辭、  
の、例、は、つ、く、は、味、へ、つ、ま、一、畢竟、け、事、ハ、荆、軻、傳、を  
と、え、合、て、字、を、下、し、然、る、ぞ、今、例、の、英雄、人、を、欺、ひ、ま  
道、徳、を、い、は、し、誤、り、出、来、ま、し、を、打、く、演、説、を、ま、た、れ  
バ、老人、暫、く、黙、し、て、住、居、多、良、雄、顔、色、を、和、ら、ぶ、  
滑、り、曰、老人、よ、天、下、を、震、へ、誰、人、か、子、事、と、直、  
談、ぶ、一、人、の、あ、ら、ん、果、忠、誠、の、心、を、と、ん、く、い、ま、さ、る、



を得ぞ。此上心を行く。名所の碑。又一通の碑  
とて。自得の書法をの墓。一玉へ必忠は孝子杯の  
事蹟を舉ぐ。以復有るも。女神天のまぶしよ。及  
以さる。西贄公舜水。命トとへく。楠氏の墓を立  
し。廷尉の忠魂。皎る。百世の下。名のとまり  
し。を。歎。あ。心より。起。る。某等。既。墓  
ら。て。姓名と記し。も上人。口。贈。灸。て。大。打。を  
と。ず。ま。り。事。を。せ。老人の文。を。し。て。後。人。歎

思ひん。老人の文有と。後。物。又。某。お。成。感。思。ん  
た。も。不。四。十。七。人。の。墓。を。并。べ。て。建。置。を。先。師。位  
持。の。廣。老。の。情。み。て。官。より。各。め。む。つ。ぬ。佛。法。の  
餘。徳。を。今。又。碑。を。立。て。号。成。表。し。せ。む。翫。ば。き。ん  
ハ。官。の。と。り。め。や。正。面。持。の。商。内。を。十。分。酒。と  
吞。め。た。る。べ。し。其。醉。が。さ。免。た。く。中。山。道。江。戸。在。と  
書。画。會。を。催。し。寫。三。が。價。画。を。圍。み。し。錢。を。り。ふ  
と。酒。か。つ。て。碎。て。な。ら。ば。結。ぶ。べ。し。と。し。文。趙

か理窟をいひても。ハテ其時、醒るの上の所了簡

墨溷化物其名寶 檢開跋扈醉顛翼

斯不養生移吞池 錢金尾羽枯無力

受業 五大莊題

評曰宝齊の碑文その糾纏を舉ハ終るかべ。それ君

子ハ厚く人を責めざとあきハ負石が只一句を存して

宝齊をさめたる。長者の凡を見くく之を。畢竟

負石が忠誠ハ昔一巡松が古川本藏の言ハ托して

啓と日本ニたつ二ノと云へ一語よくおせり。實

高を行多ざるあり。負石と巡松が本大星の作なり。校倉

の學序ハ見せたるハ。何と云ハ批判する

第二回

釋尊詰志佛

嵯峨釋迦如來年數ニ當り。本所回向院よく開帳

ハ衆人ニ結縁し。女子おる夏の事あるを。老翁男

女群來り。いろくの扇をかざり。ある中ハ東坡風の

長葉の竹。志佛と云ふを又咎めむ。志佛の本名は同玉。志佛といふ名は賢劫の四佛を我み。外に出店を初賣ハ。其九百九十六佛の名も説く。星宿劫不佛の名も。説く。怪しきもの。世に出ると。宣へば。奉尊み。吹。中。まじく世を去。京の田舎に住む。流行。後まじく。山仲如之。餘瀝を。市川。六が門を成り。立。山仲如之。餘瀝を。市川。

完齋もたに取立られ。當時は作の名人。お玉池。住宅あり。大之保聊太郎。事。四十一年の間。華嚴の初會より。双樹涅槃。八百餘種の説法。自分佛と云ひ。偏学小智の知。知。本名曰。されば唐の張南湖。老杜侍中佛と云へ。完齋の序文。文。釋尊曰。是南湖が杜氏を譽。不束也。水の藝者の佛。京都の医師。八佛。

九佛十一佛。尾張の仁左が暹羅を渡り。五佛と名付し  
ちと八金く自身傲慢の心あり。名をなすもあらずし  
や。何れもせよ。我近き因帳終り隙もあらず。聊を即  
達す。紅く聞べしと作て。五ひり。程多く日限あり。  
増成寺宿坊。寓居の対。此時節からあきはずめと  
此儉約あり。そ終八部の此能も連らき。此前より  
常燈を提げ。忍びし。此玉池。素臨し。聊を  
郎か。不事と。愛も。志。唐。け。か。放。

石湖が集を見く。清新の句を鍊。出さんと。案  
居も。所。案内も善哉々々も。机の上。影向ま  
しく。志聖堂志佛と。此より。何の因縁と。志聖  
堂と号し。何の因縁と。志佛と名付く。詳す。述す  
宣へ。聊を郎めし。七騒が。傍の。三巻の  
冊子を。其。序。あり。差出。釋。手  
あ。何志聖堂詩集。三。序。を。讀。む。  
何志や。袁子才。景傲。志佛と。号。す。汝。が。序。

志聖曰然。釈尊曰。とき哀子才自を佛と云  
しにあり。後。蔣心餘太史が多和氣めく。自志仙  
と号せし。右。隨園を敬奉して。志佛と稱して。その  
あり。それを隨園も喜びく。余を稱して。志佛と云  
あり。又。廣教主の多や。例の自傲の心けし  
門人の梅冲が志佛の歌を作り。時名を賣く。声  
價を増し。口代糊あるの便を。自稱を哀  
子才を景倣する。何事ぞ。此三も世に振る。故事自を

ある。ぬ。や。何。堂。少陵。像とあり。志聖と云  
稱。又。尚。ある。又。自志佛と号す  
蓋。張南湖が老杜詩中佛の語を取る。お。完  
又。板別の文旨あり。少陵が像を。志聖堂と号  
す。又。文山。志仙堂の例も。張南湖  
に。自志佛と稱す。杜甫  
と。自志佛も。自。稱。自。志。佛。と。号。す。  
取。自。稱。其。方。傲。慢。愚。癡





あり試<sup>し</sup>志<sup>し</sup>佛<sup>ぶつ</sup>志<sup>し</sup>聖<sup>せい</sup>堂<sup>どう</sup>と稱<sup>なづ</sup>く。汝<sup>なんぢ</sup>もあつらん  
 我<sup>われ</sup>ハ構<sup>かま</sup>はぶともおとくと。例<sup>たと</sup>一<sup>いつ</sup>言<sup>ごん</sup>てずん。諦<sup>あきら</sup>聴<sup>り</sup>  
 杜甫<sup>とふふ</sup>を詩<sup>し</sup>仙<sup>せん</sup>と稱<sup>なづ</sup>く。皆<sup>みな</sup>人の知<sup>し</sup>る。樂<sup>らく</sup>天<sup>てん</sup>が  
 劉<sup>りゅう</sup>禹<sup>う</sup>錫<sup>しやく</sup>を詩<sup>し</sup>豪<sup>ごう</sup>と稱<sup>なづ</sup>く。鍾<sup>しゅう</sup>嶸<sup>じやう</sup>陶<sup>たう</sup>彭<sup>へい</sup>沢<sup>たく</sup>を詩<sup>し</sup>宗<sup>そう</sup>  
 と稱<sup>なづ</sup>く。李<sup>り</sup>洞<sup>どう</sup>賈<sup>か</sup>島<sup>じやう</sup>を詩<sup>し</sup>祖<sup>そ</sup>と目<sup>め</sup>す。呂<sup>りょ</sup>居<sup>こ</sup>仁<sup>にん</sup>山<sup>さん</sup>谷<sup>こく</sup>  
 を稱<sup>なづ</sup>く。江<sup>かう</sup>西<sup>せい</sup>詩<sup>し</sup>祖<sup>そ</sup>と稱<sup>なづ</sup>く。る。あつらん。人<sup>ひと</sup>もあつらん  
 一<sup>いつ</sup>生<sup>せい</sup>天<sup>てん</sup>鐘<sup>しゅう</sup>嶸<sup>じやう</sup>李<sup>り</sup>洞<sup>どう</sup>呂<sup>りょ</sup>居<sup>こ</sup>仁<sup>にん</sup>語<sup>ご</sup>に依<sup>よ</sup>り。自<sup>みづか</sup>ら詩<sup>し</sup>豪<sup>ごう</sup>  
 詩<sup>し</sup>宗<sup>そう</sup>詩<sup>し</sup>祖<sup>そ</sup>と稱<sup>なづ</sup>く。い。あつらん。あつらん。蔣<sup>しやう</sup>心<sup>しん</sup>餘<sup>よ</sup>史<sup>し</sup>

は馬<sup>ば</sup>鹿<sup>らく</sup>者<sup>しや</sup>が自<sup>みづか</sup>ら詩<sup>し</sup>仙<sup>せん</sup>と稱<sup>なづ</sup>く。時<sup>とき</sup>の考<sup>かう</sup>名<sup>な</sup>を適<sup>てき</sup>園<sup>えん</sup>  
 を己<sup>おのれ</sup>と一<sup>いつ</sup>穴<sup>あな</sup>の孤<sup>こ</sup>を世<sup>よ</sup>の人<sup>ひと</sup>が承<sup>うけ</sup>知<sup>ち</sup>る。あつらん。あつらん  
 簡<sup>かん</sup>み。袁<sup>えん</sup>子<sup>し</sup>才<sup>さい</sup>を詩<sup>し</sup>佛<sup>ぶつ</sup>と崇<sup>あが</sup>めたる也<sup>なり</sup>。袁<sup>えん</sup>子<sup>し</sup>才<sup>さい</sup>も  
 能<sup>よ</sup>く。あつらん。あつらん。傲慢<sup>ごうまん</sup>の心<sup>こころ</sup>起<sup>おこ</sup>す。根<sup>ね</sup>が聖<sup>せい</sup>學<sup>がく</sup>と疎<sup>そ</sup>く。  
 空<sup>くう</sup>詩<sup>し</sup>浮<sup>う</sup>文<sup>ぶん</sup>と竅<sup>あな</sup>を。賣<sup>う</sup>名<sup>な</sup>射<sup>しや</sup>利<sup>り</sup>の匠<sup>じやう</sup>夫<sup>ふ</sup>を。あつらん。あつらん  
 尤<sup>なほ</sup>の事<sup>こと</sup>也<sup>なり</sup>。それと景<sup>けい</sup>倣<sup>ぼう</sup>。簡<sup>かん</sup>も。志<sup>し</sup>佛<sup>ぶつ</sup>を  
 名<sup>な</sup>。其<sup>その</sup>方<sup>かた</sup>も序<sup>よ</sup>文<sup>ぶん</sup>を。證<sup>しやう</sup>左<sup>さ</sup>。北<sup>きた</sup>三<sup>さん</sup>や完<sup>くわん</sup>之<sup>の</sup>力<sup>りき</sup>  
 と。の。家<sup>け</sup>實<sup>じつ</sup>學<sup>がく</sup>。卑<sup>ひ</sup>劣<sup>りやく</sup>心<sup>こころ</sup>が。見<sup>み</sup>て。極<sup>ごく</sup>淺<sup>せん</sup>。

と眉をこもろ丸く宣ハ聊を即肌又汗ハ海面ふ  
 紅潮漲ル如く難く了向拜す佛ハ廣く慈悲  
 三界の元生以見るも。羅喉羅の如くと決す不  
 知が志佛と名をさるる。たは世の害も少  
 ころとる。世尊は流を汲と云。八字の出家とも  
 入。佛の秘、秘法をれ身。自性自悟の身を  
 く。世上濟度の利益となく。頑童梵嫂と身を  
 齎し。酒肴珍味と腸を爛し。汝ハ各あまは道

以事方見苦しく存るも。世は汝が知る如く。つと後  
 国家より八宗十宗立置り。廣く慈悲の海政。  
 万国を二のつとめ。凡愚の知る如く。汝は  
 たぬく平仄をさるる。東枝風の墨行を書き。世に  
 とて。そやこそ世。遊手しく。右平を會う。一果をさるる。  
 右平の國恩をも。さるる。心めく。け難問ハ。人々  
 る。汝が世の害とさる。伏ハ下局。まの細く。洗くを  
 すべし。サア佛と名付る。汝ハ。いり。來功德方便。う。いり。

いふも、廣太教は此事ある。如何なる汝が覺の義  
つらや。吾れも亦々同語くま。志佛茫然とて  
詞

護道我學放翁去

心操放翁終百癖

作詩好知鬼反吐

於世教無些子益

評曰志佛ハ詩を作て陸放翁ニ慕倣せり。され

と放翁ハ宋の忠臣胸次脱洒の人なれば。今の世ニ

いふも、くあつても。おろそかしくも。志佛

生酒好く。大佛餅金龍山福く。玉く不れる。

お。釈迦如来しりモチく。そのはち好くも。

志佛がとらありひるも理あり。

第三回

米芾詈山文

阿山文百弟子ニ書論を口授し。後机あり。

眠る夢。米元章と名乗て。獨を通。米元章

て曰。足下近來書名せ。噪く。止事を得。て。

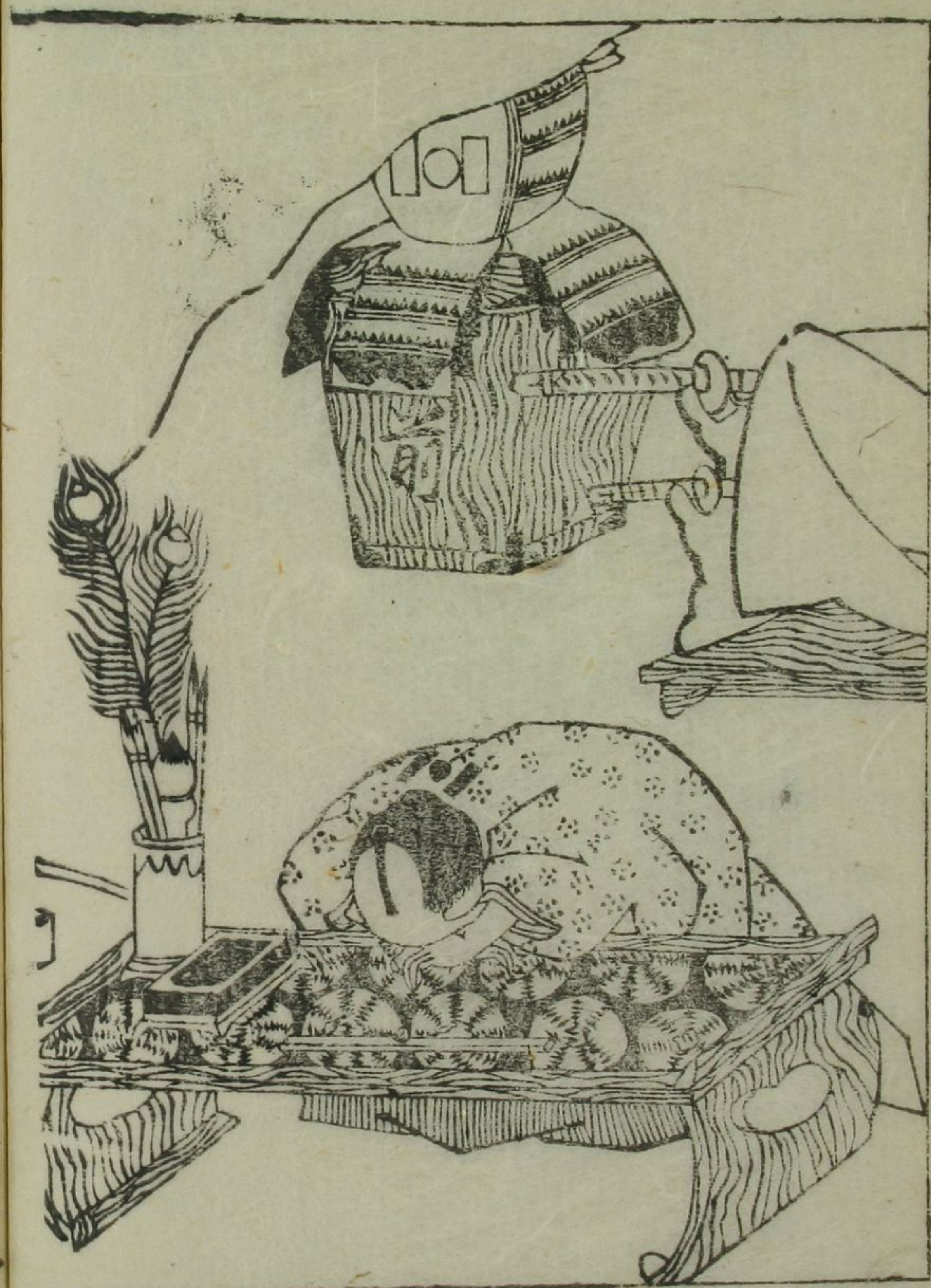
思断其外古人の餘論を拾ひ集め梓行して聲  
 價を考へんとす。尤も世俗のあはれみ。於市  
 井庸俗の射を得て。人々崇せられ治療の論を  
 けり。學子医の叙跋を乞ひて。上本し。世工の人び  
 盡惑し。治療上手のふを會せんとする。今  
 是下我を教ふる。他と異なり。下は。下  
 下の爲。予が喜ぶ處。何れ。我世に在  
 時改。顛の名あり。尤も中重よ。治り。治り。法を

得。その奥を悟り。運用神化自得ある。何れ。此  
 心より。世に軽ん。俗を脱し。終逸自適。我  
 采と。是下。市中。居る。俗を脱し。利  
 を射る。心。何を我境界を知り。妙樂を。ん  
 や。交を。く。の論。處。凌。時俗の耳目を新  
 する。の。あ。て。墨比の。理。も。云。れ。を。殊。更  
 何。よ。升。降。有。く。の。質。性。限。り。を。試。し。我。論。を。守  
 也。水。字。八。法。ハ。右。来。お。付。と。し。入。甘。妙。會。得。

老がく。一又學藝を法を得るも。執筆運  
 用ハ手より。變化奇詭ハ神を以て我のこもる。  
 人の性質は限る所あり。歐褚虞薛ハ王氏父子  
 を法と取て正しく学び。自ら一家とあり。王氏  
 又似也。然るに成佛作祖の器も。品是賞  
 鑑。あつてハ相及ぶる遠し。れ亦所謂時の  
 升降のせむば。況後世の人を以て。藤亭黄  
 庭の神妙變化。豈窺易くんや。東坡章子厚

可笑ふ者ハ此老の心を仰とて法より。次自放はして。  
 一家をたもむ。そのの活あり。是下山谷が活ハ一  
 了。亦復単鉤なること。又一偏の論あり  
 了公論あり。たど単鉤ありとも。吾子行ハ云  
 一如也。第三指夾襪セざれど。一畫も力あり。世  
 俗不い。も鉤筆曲書のみあり。スるあた  
 へ也。亦復豈かろの如く。も下。腕を  
 取く。飯を喫してスよ。三指夾襪セざり。よ口

中は食を送らんや。より送る得らむ。傍観より  
う。自分と不自由なり。又草をまひく楷。用  
筆法新のあり。昔の時より。是  
と。楷の礎の云々。何れ。悉く世を  
概せんとも。あつべし。云々。通  
免。字。楽の字の論。行草を立おれ。楷  
篆。み用い。且又。足下。心。馬。扁  
佳。家。二三。お。並。ふ。時。皆。運。筆。を。異。あ。ら。る。と。を  
書。才。妙。用。変。化。と。い。ふ。る。ハ。墨。本。法。帖。を。心。く。ア。る  
金。一。凡。古。人。の。用。筆。を。し。く。歌。味。を。さ。は。知  
し。難。く。足。下。た。め。胡。北。新。と。サ。し。く。筆。を  
得。ら。ず。何。れ。ら。董。堂。が。甘。冒。凡。の。害。ある。ハ  
増。す。又。足。下。の。論。を。不。暫。く。置。く。夫。古。今  
書。才。の。く。く。書。學。を。さ。者。ハ。大。方。疎。漏。を。  
書。學。あり。書。才。を。さ。法。は。傳。せ。し。て。是  
と。多。く。臨。摹。み。偏。を。さ。ば。生。を。活。動。あ。く。或



古人の奴僕と多し。或ハ飾人形と多し。専ら其の  
 古法を以て。自己の精神を運用するもの也。  
 尤も下ノ告げ事也。書名も必人必よりの  
 貴し。人不院と高き也。書に限らず。小技も  
 多く不朽と云ふ事也。古人テは。異多し。  
 愚者顔柳の忠義節烈を以て。其の  
 の多し。格又ハ多し。其の才人必し。其の  
 朽也。今テ是下逼りたる也。其の才人必し。其の

世に多くてもやまき。高貴の人を門人。其書画會  
 頭を以て。顔措と倣ふ。其の才人必し。其の  
 由良之助。顔氏在世の時也。癡肥也。其の  
 人とあり。其の才人必し。其の識者何れ  
 評せん。何を以て。其の才人必し。其の  
 不朽の覺束也。今より別ニ其の才人必し。其の  
 界を以て。市中城の如き。賣名射利の念を止  
 め。法もよく。精神を運用するもの也。悟らば。



我わがと又喜よろこぶごとし。み餘あま云いずるを成なる多おほくわき丸まる。  
後のち會あひを期もちすと。まよふと覺おぼへ。爰こゝ醒さぬ米こめ蓋おほ少すく。  
く者ものありとくとも。終つひ俗よこ心こゝろを友ともの如ごとく。友ともを  
以もつ徳とく哀あはれ。爰こゝ米こめ芾びととんば。

學がく詩し書しよ畫が同どう興きよう連れん 街まち伎ぎ賣う名な各かく發はつ塵ちん  
擊つ價げ洪こう騰とう萬まん犬けん嘸ふ 後のち來き不ふ當たう半はん文ぶん錢せん

友人 未足齋題

評曰米芾晉唐法書一爛醉一々。その凡たゞ也なり

高たか妙みやくを極たぎむ。自らそのま室むろを号なづけて。寶たから晉しん  
齋さいといふ。後のち人ひと法はふを古ふる人にみとて。我わが知しるは安やす。  
その酒さけ後のち迹あとを擬なへんと。米こめ顛てん乃なり  
我わが意い非ひず。この一ひと話わをば。俗よこ眼がんを一ひと洗せんん  
ことをおぼゆ。  
一人ひとり田でん夫ぶと号なづけて。役やく者しやの親おや玉たま。市いち川せん三さん井せい。  
おちおち親おや玉たま。市いち川せん三さん孩がい。田でん夫ぶ笑わらむ。曰い米こめ芾び。  
と唐たう玉ぎよくのくうして。我わが三さん津しんの由ゆ良らの助すけを知し。

る。是下何ぞ我を毀るをばんや。

第四回

栗三郎五三

菊乳佐太夫。何がままう。金儲せんとおもひ。唯園詩話よりのおひなあり。町方へ居て。巳後より庸医。田舎を不ぬく。詩語碎金。宝詩語。よく模擬する。富家の子弟は。詩を集めて。其くは身上より。百王抄百之或。子正。刻料雜

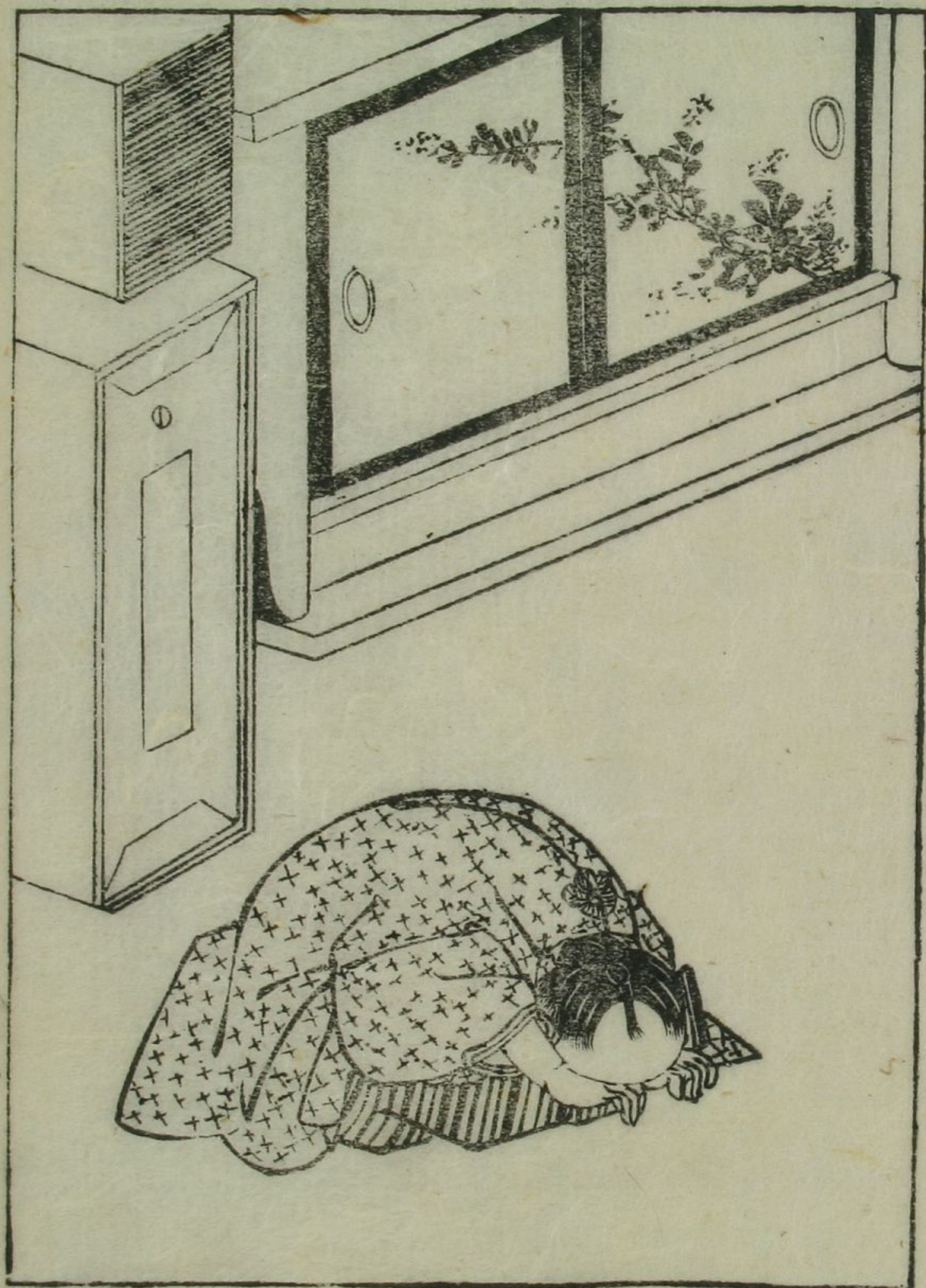
費の資として。勢いありと。了簡あり。が。名。なる。その詩を集めて。ゆく。世の賞歌と。賞束を。い。あり。ひ。依く。没故。一人の詩を。集中。入。た。その。資料の。徳。ある。と。多。技。心。あり。た。で。し。る。り。然。る。に。一。年。死。去。し。り。栗。三。先。生。の。秘。靈。の。を。成。憤。り。或。時。人。を。て。本。町。植。木。店。に。お。り。佐。太。夫。が。魂。神。を。接。し。呼。取。り。ま。し。佐。太。夫。は。か。り。事。と。露。を。し。又。

金儲の工夫最中。殆目々々々。恍惚々々々々。  
 時。その人の僕来りて。聖堂より急用あるを以て。  
 さらば。佐々夫と申す。物と取敢て。支度して。彼  
 老と同道して。聖堂より。仰言門を入りて。  
 講堂より通らるる。是は。栗三先生。上座あり。  
 其外列坐の人も。多く。古くあり。心は怪  
 み。躰も。栗三先生曰。是下話話を。若  
 かりとも集りて。由早速。挨拶と。さす。

不。甚心延り。や。さ。軽少。あ。つ。と。小判。二枚。白  
 木の。基。二載。さ。さ。出。し。ふ。佐々夫。忽ち。顔色。を  
 和。ら。存。存。あ。ぶ。る。さ。の。内。謝。れ。は。恐。ろ。戴。信。  
 と。栗三先生曰。是下話話を。著。し。或  
 賞。譽。し。或ハ。評。語。と。か。一。時。又。冊。を。あ。り。たる。趣。  
 其。集。り。入。る。商家。又ハ。農。家。の。子弟。ら。さ。は。依。て  
 自分。傲慢。心。と。起。し。我。が。法。を。五。三。く。譽。た。り。な。も。  
 其。心。も。その。家。業。を。怠。り。一。廉。の。法。人。氣。

取らざる。尤歎るる。や。且我幼年よりして  
 聖門有用の學を以て學び。は。我心も一にあり  
 ぬ。然るに足下我を以て。彼等位卑陋の庸人と  
 同く評せしむ。遺恨ある。我家ともふ。足下の  
 知る處さす。何れに。豈足下の浮賞を切ら  
 ぬ。足下豈も減否を志せんや。全我等を飾道  
 具あり。名を賣り。利を得んとするや。俗に  
 所謂虎豹の皮を以て。大豕を威するの事候を。

さてはとくらの餌又かり。足下の門に入るとの  
 碌くのくま。空詩浮文を以て。學を以て。聖門の學を  
 とりて。學とよむ。某何が足下の謀計又後て。名を  
 賣。ことを求めんや。卑劣は手取浅ま。威儀  
 嚴然。一々ヤヤと。五三低頭。口以て。用  
 らる。は。漸々。近頃。寬齋。偽唐詩選  
 の論を小冊に綴り。梓行せし。そ。又何事。我  
 送の。南郭。子鱗。を。崇。如迷。



上  
下



上  
下

その廣く作らるるを乞ふは但來と又やど然るに  
太宰徳夫介然と一ナ不解と著く。于鱗が  
選と云を疑ふ。その対ある師と云一但來兄  
ともありし。南郭の尊尚する唐の選と  
起す。右宰純が眼力實又くまざる。そのハ  
心と子活又けや。及金我北三が筆。口  
可極りや。偽選と論じ。三歳の筆も知る。必  
心然るに列す。己う新又元。極論と云。是

又射利の卑心あり。先へ行々の跡あり。衣裳の美  
樹帯の解も。そのハ見く。そのも難く。六  
を宰。その射に在く。其社中。居る偽を知る。其を  
難く。其。平心と論じ。その清人の偽。或は  
其を宰。其眼力あり。その改稱も。其のみに  
其風の全ざる。利を射る。其心熾盛たる。其  
己。其物。其。其。其の心あり。其も  
別。其。其。其。其の志。其論

儀比命山は汝より置きし度よに空は浮  
文を梓行し。令儲せんといふを。彼畢竟汝  
等が著述の世教改道の害のゆゑ多く。益ある事  
少し。多強く著述梓行せんを。我買林家  
後一々切らさん。そ国家の汚為は又商人百姓  
の後世に得空の浮文よりの才を忘る。其業を  
怠る。ちうり。いん。我仁心あり。今日ハ先その  
いづれは。は。自心と改めざるは。汗。い。ぬ。ぐ。ま

まゆの一ま。う。ま。教。ま。佐。夫。友。の。覚。た。る。如。懐  
中と搜。う。ん。ま。バ。小判。三枚有。何。も。や。ま。怪。し。れ。う  
と。結。く。ん。ま。ま。バ。コリヤ。そ。蟬。松。小判。

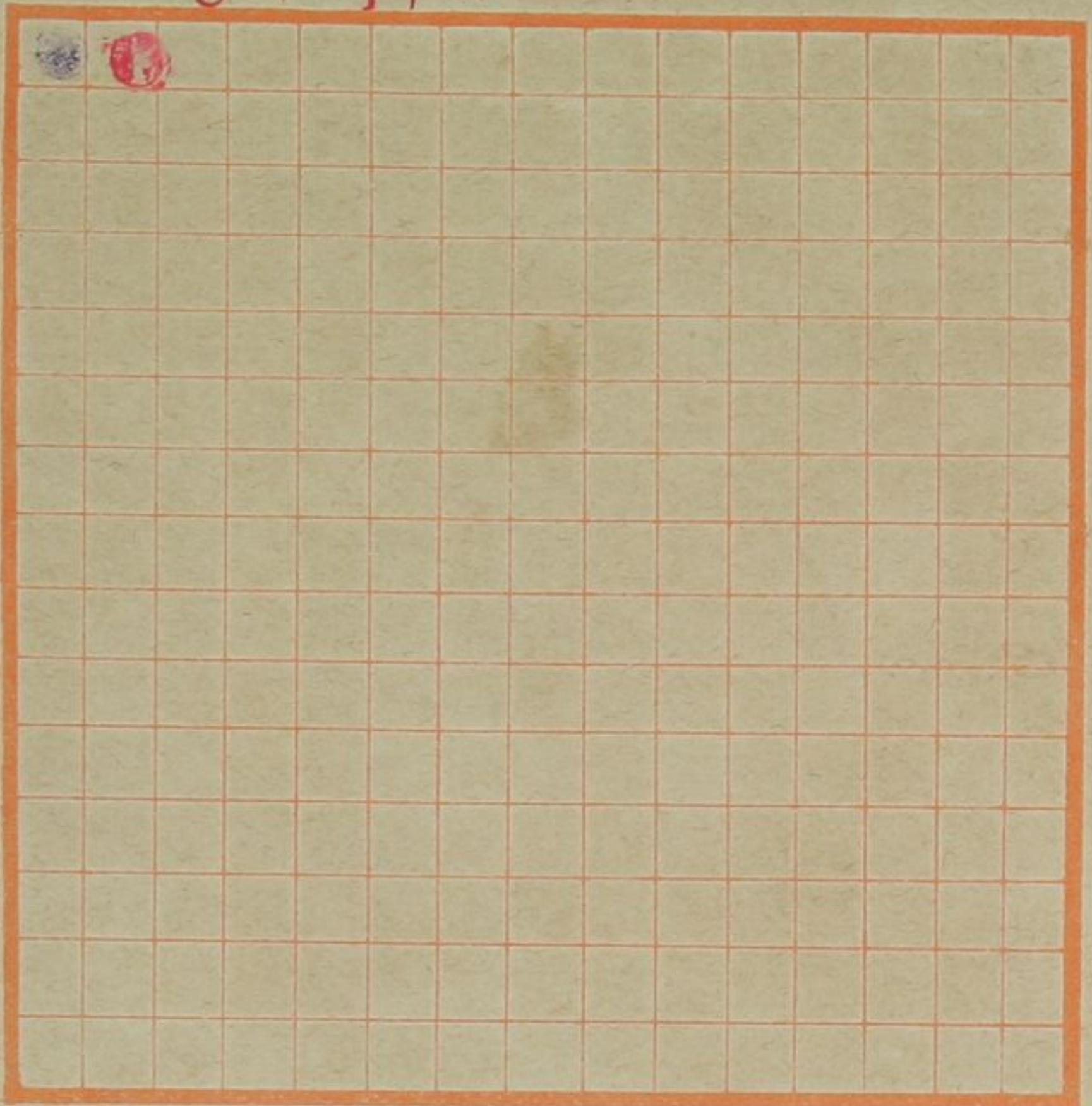
五山強欲治家苛  
生國讚州非相摸  
姓市完辭射利射  
不經紀商見限早  
貪取金錢總耶摩  
大山大商不道多  
江湖社結大麩閑  
貪取小祿謀後來

晩學弟

野徹芳題

二十八年

3年11月



評曰黄石公の丹書。命の四業。一曰忠。又  
 背き。二曰己を恃み。三曰不肖。四曰賢能  
 を妬む。總て四の業あり。世俗の人。評。欲の  
 五山あり。一曰活の碎行。二曰師匠のふを賣  
 る。三曰大家の顔色。四曰詩會。五曰書画會。  
 總て五の山あり。この四業五山。わづらひむ。  
 盛さるるの事。  
 妙く寺後卷



